

《インタビュー記録》

## 歴史教育体験を聞く

佐藤伸雄先生

日時：2004年1月6日

場所：東京都豊島区南大塚

聞き手：茨木智志・鈴木正弘

### はじめに

前号に記したように、歴史教育に携わってきた諸先生方の歴史教育の体験、すなわち自分が受けてきた歴史教育、そして自分が行なってきた歴史教育の話を軸として、様々な経験や思いをインタビューの形で体系的に聞き取り、その記録を活字にすることで、歴史教師の共有の財産とすることが、この「歴史教育体験を聞く」の目的である。

「歴史教育体験を聞く」の第2回目として、佐藤伸雄（さとう のぶお）先生にお話を伺った。佐藤先生は1930年のお生まれで、高校卒業後、出版社に勤務するかたわら、1949年の創設当初から歴史教育者協議会の活動に携わって来られ、現在まで歴史教育運動に当たられている（2004年8月までは同協議会委員長）。その間に日中の交流にも尽力され、また専門学校で歴史の授業を担当されてきた。

以下は、佐藤先生のインタビューの記録である。

### 1. 歴史教育との関わり

— 佐藤先生と歴史教育との関わりについて、生い立ちを含めて、お話をください。

はじめに話しておかなければならないのは、私の場合、普通の歴史教師とは異なる妙な経歴で今に至っているということです。歴史教育の体験というと、自分がどういう歴史教育を受けてきたか、大学でどういう勉強をしてきたか、教師としてどういう歴史教育をしてきたかというのが普通かと思います。ですが、私は高校卒業後、すぐに働かなくてはならず、出版社に就職しました。出版社とは言いますが、ここで歴史教育に関わることが、仕事の中心になりました。その後、歴史教育者協議会の専従の仕事で10年ほど勤めて、その時以来、歴史教育に関わる発言をしてきました。また、専門学校の非常勤講師として歴史の授業をしてきました。これは1967年から今まで続いています。こうした事情を、ご承知ください。

私は1930年5月14日、横浜の生まれで、父は佐藤喜四郎といいますが、私は父の顔を知りません。数えて6歳のときに、父は「関東州」に単身赴任中に旅順で没しており

ます。私と母は、東京市大森区<sup>1</sup>の伯父・佐藤喜太郎の家に同居しておりました。伯父は銀座のオリンピックというレストランの初代の社長で、かなり羽振りのよい生活をしておりました。父の死後、色々あって、母だけが家を出ております。そして伯父と伯母も間もなく相次いで没したため、私は天涯孤独の身となり、伯父の友人であった後見人の下で、伯父や伯母の遺産で生活していました。小学校は、地元の大森区の学校でしたが、私の体の弱いことを心配した後見人たちが、カトリック系のお坊ちゃん学校であった私立の暁星中学<sup>2</sup>に、私を進学させてくれました。ここで高橋礪<sup>3</sup>先生と出会うことになります。

## 2. 戦時下の小学校と中学校

一 小学校での歴史の授業は、いかがでしたか。

私の小学校時代は、1年生のときに、日中全面戦争が始まり（1937年7月）、5年生のときに、太平洋戦争が始まる（1941年12月）という時代でした。小学校は、東京市大森区の池上第二尋常小学校<sup>4</sup>に入学しました（1937年4月）。卒業したとき（1943年3月）には、国民学校となっていました。歴史教科書は、『初等科国史』の一つ前の『小学国史』でした。これはよく覚えています。ただし、自分が受けた歴史教育といった場合、国史の教科書もさることながら、修身や国語や唱歌の教科書にも歴史教材がありました。これらが頭の中で、渾然一体となって残っています。今、思い出してみると、神話については、不思議なことというよりも、そういう国だと、まじめに信じていました。また5・6年のときの校長が、神がかった人で、子どもに「祝詞」を暗記させました。これは授業の中ではなく、校長の訓話として教わったものでしたが、私は、今でも暗唱できます。酒宴で披露したところ、結婚式のアルバイトが出来ると、冷やかされました。

小学生の頃は、かなり強烈な軍国主義、超国家主義の少年でした。当時の軍部や政府の言っていることが、そのまま正しいと思いこんでいました。それが中学生になって、疑問に思ったこともありました。3月10日の空襲（1945年）のときに、高台にあった私の家から、下町の焼けている様子がよく見えているにもかかわらず、「下町方面に発生したる火災はすでに鎮火せり」という東部軍管区の発表がありました。それを聞いて、変だと感じたことを記憶しています。この当時は、「どうなるのだろう」という焦りの気持ちがありました。戦争が終わってからは、「なぜ、騙されていたのだろう」という思いが強まっていくことになりました。

---

<sup>1</sup> 東京市大森区：現在の東京都大田区の一部。

<sup>2</sup> 暁星中学（旧制）：現在の暁星学園中学・高等学校（東京都千代田区富士見）。

<sup>3</sup> 高橋礪一：1913～1985年、日本史専攻。

<sup>4</sup> 東京府池上第二尋常小学校：現在の東京都大田区立池上第二小学校（東京都大田区中央）。

<sup>5</sup> 『小学国史 尋常科用』文部省、上巻原本発行1940年2月、下巻原本発行1941年3月。第5期の国定初等歴史教科書であるが、1943年度からは第6期の『初等科国史』が使用された。

ー 小学生のころに、読んだ本で印象に残っているものはありますか。

小学校に入るまでは、『幼年倶楽部<sup>6</sup>』を、小学校に入ってから、『少年倶楽部<sup>7</sup>』を読んでいました。また、講談社の『少年講談<sup>8</sup>』なども見ていました。このなかに、清水の次郎長などの歴史ものが入っていたし、高学年の頃に「次郎長ごっこ」が流行しました。当時、神田ろ山<sup>9</sup>の講談を速記したものも読みましたが、子ども向きの本では、貧窮した父親と娘の心中の話であったのが、実は男女の心中の話であったことを知って、活字で書いてあるものも、本によって違うんだということを感じました。同時に、清水の次郎長は幕末の頃ですが、授業で教わる歴史に全然出て来ないことを不思議にも感じました。ただ小学生のときに友だちのまねをして覚えた広沢虎造の浪花節のものまねは、かくし芸にしていたのですが、中学に入ったら、本物の広沢虎造<sup>10</sup>の息子がいたので、やめました。

ー 中学校の歴史の授業は、どのようなものでしたか。

中学校での歴史教育は、本来は1年国史、2年東洋史、3年西洋史、4・5年国史でした。ところが戦時短縮で、中学校が4年制に圧縮されていたため、私たちは、1年で国史と東洋史を半期ずつやりました。2年で西洋史をやったはずですが、全く記憶にありません。教科書はよく覚えていませんが、1年のときは、中等学校教科書株式会社の検定教科書でした。国史と東洋史は、八巻先生という甲州出身のカトリック信者の方が担当でした。国史では「建武の中興」を詳しく説明されたことを記憶しています。また、東洋史は板書を写すという授業でした。

この頃、2年生になると勤労働員の通知が来ることになっていました。しかし不思議なことに、私たちの学校には2年生に対する動員の通知が来ませんでした。ようやく来たのが、3月10日の空襲で学校が焼けた後でしたが、中途半端な短期のものばかりでした。始めの勤労働員は関東配電（現在の東京電力）の仕事で、強制疎開で壊された家のメーターを回収する仕事でした。その後は、焼け跡や疎開地の整理や物資の配給などで一週間ほどの動員が多く、その合間にも授業は行なわれていました。同級生も疎開などで減ったため、2年までの4クラスは、3年で2クラスに再編されました。学校は空襲で焼けましたが、幸い焼け残った鉄筋コンクリート建の一階部分や柔・剣道場などを教室として使い、そして、それでも不足する分は軍事教練の時間としての授業でした。2時間、教室内で授業をすると、2時間は外で軍事教練という具合でした。配属将校も一人で何校かを受け持つ状態になり、在郷軍人の教官も次々と応召される有様で、そのため

---

<sup>6</sup> 『幼年倶楽部』：大日本雄弁会講談社による幼児向けの月刊誌。

<sup>7</sup> 『少年倶楽部』：大日本雄弁会講談社による児童向けの月刊誌。

<sup>8</sup> 『少年講談』：大日本雄弁会講談社による少年向けの講談シリーズ。『清水次郎長』は1937年発行。

<sup>9</sup> 神田ろ山（初代）：1946年没、講釈師。

<sup>10</sup> 広沢虎造（初代）：1899～1964年、浪曲師。

要領のよい卒業生や5年生が助教として使われ、私も1～2年の教練を教えたことがあります。1945年6月からは、東京駅前の中央郵便局に行かされて、郵便物の分けをしていました。8月15日の「玉音放送」もここで聴きました。ただし、動員先が軍事産業でなかったこともあり、勤労働員は敗戦後も続き、9月20日にやっと終わりました。

### 3. 高橋碩一先生と戦中・戦後の教育

— 高橋碩一先生は暁星中学での恩師と伺いましたが、どのような授業をされていたか。

高橋先生は、私が中学1年のときに、軍隊から帰ってきました。高橋先生は2年ほど前に召集されて、北支派遣軍にいましたが、古年兵のリンチに遭って病院に担ぎ込まれ、後方へ後方へと送られて、帰って来ることができました。もともと暁星中から慶応大に進み、卒業後は大学院で勉強しながら、錦秋高等女学校で教鞭を執られていました。その後、母校から呼ばれて、暁星中の教師をされていました。私たち1年生は初対面でしたが、召集前を知る上級生たちには、大変に人気のある先生でした。

高橋先生は暁星中に戻られて、「歴史班」を創設しました。当時は報国団の歴史班という位置づけでしたが、要するに、今でいうクラブ活動です。私が2年生になったときで、歴史班に希望者が殺到しました。そのため、班員は選考の上で発表されることとなり、私も選ばれました。このときに希望者の学籍簿などを調べるなかで、父親を早くに亡くした御自分の境遇と似た、私のことをお知りになって、ずいぶんと面倒を見てくださいました。この歴史班が、私の高橋先生との出会いでした。

敗戦前に、高橋先生の歴史授業を受ける機会はありませんでしたが、歴史班の活動を通じて、様々なことを教わりました。歴史班は正規の授業としては週一時間でしたが、それ以上の時間を使って、色々なお話を伺いました。時には、青山の自宅で蔵書を前にして、時には、上野の帝室博物館（現在の東京国立博物館）で展示してある土器を前にしての講義でした。また慶応予科のあった日吉校舎で発掘された、弥生時代の集落跡の見学に連れて行ってくださいました。戦争中でしたが、神話教育のひっくり返しを意図されていたのだと思います。歴史班は一つの学年が十数名でした。2年から入って、私は学年の責任者にされましたが、上級生が勤労働員でいなかったので、“最上級生”として羽を伸ばしていました。

— 戦争中の高橋先生について、もう少し詳しく教えてください。

高橋先生は学生時代に、羽仁五郎<sup>11</sup>氏の著作から影響を受けて、学生のときにすでに歴研（歴史学研究会）の会員になっています。錦秋高女での国史の授業では、高天原から始めるべきであったのを「神様の話は、うっかり触ると、たたるから、遠慮しようよ」とか言って、大化の改新あたりから始めていたそうです。暁星中に移った頃からは、「そ

<sup>11</sup> 羽仁五郎：1901～1983年、歴史学専攻。

うもいかなかった」ともおっしゃっていましたが。その高橋先生も、歴研の先輩である古代史の北山茂夫<sup>12</sup>氏が、戦前の和歌山県立田辺中学で、いきなり万葉集から始めていたことを教え子だった人から聞いて、「北山さんのほうが、役者が上だ」と言っていました。また、高橋先生が兄事されていた前田一良<sup>13</sup>氏は神戸第二中学で、黒板に横線を長く引き、それを四等分して一番左側の部分だけをさらに細かく分けた上で、「シナントロプスという人類の祖先は40万年前だから、ここだ」と一番右の端を示し、次に「(紀元)2600年はこの辺だ」と左側の細かく区切ったあたりを指して説明されたそうです。この話は、前田先生の教え子だった人から私が聞いたことです。戦争中でも、大学で歴史学を学んだ中学校・女学校などの歴史教師の中には、このようなことをした人も、たくさんいたはずですが。当時の中等学校の生徒が選ばれた存在であったことも背景にはありますが。

中学1年のときに、こんなこともありました。校内での「大楠公六百五十年記念」講演会があって、その講師が、高橋先生だったのです。高橋先生は「楠木正成は、軍人勅諭の精神を表した武士である」として、軍人勅諭にあるように、政治に関わることなく、潔く死んでいった正成を讃えるという講演を、配属将校の目の前で、行ないました<sup>14</sup>。講演の後で、「先生、思い切ったことを言いましたねえ」と、上級生が高橋先生に話しかけてきたそうです。1年生の私たちには、その“意味”がよく理解できていませんでしたが、4・5年生にはかなり伝わっていたようです。

また戦後になって聞いた話ですが、高橋先生が授業の中で「満州事変はどうも臭い。ひょっとすると関東軍が起こしたのでは」と、ちらっと漏らしたところ、翌日、ある生徒から父親の手紙を渡されたそうです。その父親というのが森島守人<sup>15</sup>で「私はそのときに奉天総領事館にいましたが、確かに関東軍がやったものです」という旨が「御火中下さい」の添え書きとともに記されていたそうです。また、錦秋高女でも、暁星中学でも、治安維持法違反で職員室から連行された教師がいたそうです。高橋先生は政治活動をしていなかったためか、逮捕されることはありませんでしたが、書いたものを調べられたら危なかったよと、後に言っておられました。そのような時代の中で『洋学論<sup>16</sup>』のような本をよく書くことが出来たものだと、戦後になって評価されました。『日本の政治<sup>17</sup>』という政治史の本も戦中に共著で出されましたが、「明治維新」の部分がありません。版を組んだ時点で、危ないということで削除されたそうです。高橋碩一著作集を編修したときには、残されていたゲラを使って「明治維新」を補遺で入れました<sup>18</sup>。

---

<sup>12</sup> 北山茂夫：1909～1984年、日本史専攻。

<sup>13</sup> 前田一良：1907～1978年、日本史専攻。

<sup>14</sup> 佐藤伸雄『戦後歴史教育論』（青木書店、1976年）21～22頁で紹介されている。

<sup>15</sup> 森島守人は、後に『陰謀・暗殺・軍刀——外交官の回想——』（岩波書店、1950年）において、このときの関東軍の動きについて詳述している。

<sup>16</sup> 高橋碩一『洋学論』（日本歴史全書20）、三笠書房、1939年。

<sup>17</sup> 渡辺保・高橋碩一『日本の政治』（歴史学叢書、日本研究篇2）、蛍雪書院、1940年。

<sup>18</sup> 高橋碩一『高橋碩一著作集 別巻2教科書、遺稿・補遺』（あゆみ出版、1987年）に「近世の政治と

ー 敗戦後の中学校での歴史の授業は、どのようなものだったのでしょうか。

まさか、あのような形で敗戦になるとは思いませんでした。私の保護者になってくれた人は、軍需工業で働いていて事前に情報があつたのか、しきりに、ぼやいていたことを覚えています。後になって、彼は知っていたのだなと思いました。重大放送があるということで、8月15日の正午に集められて聞きました。難解な文語でしたし、なんのことだか、さっぱり分かりませんでした。負けたと分かった後も、どうなるのだろう、という不安が先にたち、無我夢中でした。

今まで騙されていたと強く感じたのは、秋になってからです。占領軍の「真相はこうだ<sup>19</sup>」というラジオ放送もありました。これはアメリカに都合のいい内容になっていたとは思いますが、これまで我々が教え込まれてきたことと明らかに違いがありました。

1945年は、中学3年でした。私は教科書の墨塗りはしていません。だが2年後輩の加藤栄一君は、墨塗りの体験を証言しています<sup>20</sup>。敗戦後の2学期は、高橋先生の国史の授業を受けました。この国史は、考古学、つまり縄文・弥生から始まりました。卑弥呼なども出てきて、私を含めた歴史班の面々はすでに知っていることでしたが、他の生徒はずいぶん興奮していたことを覚えています。教科書は使っていなかったと思います。大変におもしろかったのですが、1945年12月31日の指令<sup>21</sup>で国史の授業が出来なくなり、年が明けて3学期になったら、高橋先生の授業は西洋史になりました。高橋先生が、学生時代に勉強された英文の書籍を前に置いて、訳しながらの講義でした。フランス革命の話などをされていましたが、マリー=アントワネットはマリア=テレジアの“姉妹”と間違えて訳した誤りを、生徒から指摘されて、“娘”と訂正されたことなどを覚えています。また外国史の暫定教科書<sup>22</sup>は覚えてはいますが、授業で使った記憶はありません。

中学4年と5年は、高橋先生が担任でした。4年になってから、いつ国史の授業が再開されたのかは、はっきり覚えていません。戦後の新しい教科書として出された『日本の歴史<sup>23</sup>』は使いました。高橋先生から、けしかけられて、これを批判したこともありました。

---

明治維新 第六章 明治維新の成果と現代日本への宿題」として収録されている。

<sup>19</sup> 「真相はこうだ」：1945年12月から始まったラジオ番組。週1で10週放送され、名称を変えて、約1年間続けられた。

<sup>20</sup> 「〈座談会〉高橋委員長に学ぶもの」、『歴史地理教育』391号、1985年12月臨時増刊号、9-10頁。

<sup>21</sup> 1945年12月31日の指令：「修身、日本歴史及び地理停止ニ関スル件」

<sup>22</sup> 外国史の暫定教科書は、文部省を著作兼発行者、中等学校教科書株式会社を翻刻発行者として、『暫定中等歴史一』（内容は東洋史。〔前〕が1946年4月21日発行、同日翻刻発行。〔後〕が1946年9月23日発行、同日翻刻発行。）と『暫定中等歴史二』（内容は西洋史。〔前〕が1946年5月17日発行、同日翻刻発行。〔後〕が1946年11月30日発行、同日翻刻発行。）が発行されている。

<sup>23</sup> 『日本の歴史』文部省、中等学校教科書株式会社、1946年10月。

一 佐藤先生は、『戦後歴史教育論』（青木書店、1976年）の48頁以下で、1947年8月発行の『西洋の歴史（1）』（中等学校教科書株式会社）のいくつかの記述が問題を引き起こし、「カトリック教団側にとって不満であるとして、上智大学編『西洋史上の諸問題—「西洋の歴史」への補遺』という本文6ページほどのパンフレットが作成されてカトリックのミッション・スクールの生徒たちに配布された」と紹介されています。このパンフレットは暁星にも配られたのでしょうか。

『西洋史上の諸問題』は、確かに暁星で配布されました。これを私自身が使ったかどうかの記憶は、はっきりしません。ただし修道士の若手の先生が、人類の誕生に関するところのことを、「この本（『西洋史上の諸問題』）よりも進化論のほうが合理的だ」と教室で言われたことは覚えています。この先生から西洋史を教わったかどうかは記憶は曖昧です。残念ながら、配布された『西洋史上の諸問題』は、どこかに失ってしまいました。また『西洋の歴史（1）<sup>24</sup>』については、私自身は使った記憶がないのですが、使わなかったとも言い切れません。

一 新制高校での歴史の授業について、お話しください。

前にも述べましたが、本来5年制であった中学は、戦時短縮で4年制になっていました。そのため、私が1年に入ったときに在籍していた3年生からは、4年間ということになっていました。中学3年のときに敗戦になって、元の5年制に戻りました。1つ上の学年は4年で卒業させられましたが、我々の学年は5年で卒業して、大学に進学した者もいました。私は1948年3月に旧制中学5年を卒業して、4月には、すぐに同じ校舎で新制高校3年生になりました。そして1年間で再び卒業しましたので、私は旧制中学の最後であるとともに、新制高校1期生ということになります。

新制高校3年のときは、上智大の大学院を出た方が来て、西洋史の授業を受け持ちました。新制高校の社会科の選択科目は4つあったはずでしたが、授業はこの西洋史だけでした<sup>25</sup>。週3時間ぐらいだったと思います。授業が聞き取りにくかったこともあり、反発していました。授業の1時間をもらって、討論会をしたなかで、その先生を批判したのです。そうしたら、その先生から1冊ものの『ローマ帝国衰亡史論』を手渡されて、これで1時間授業をするように言われました。私は、困り果てて、他のクラスに講師で来ておられた大学院生の椋川一朗<sup>26</sup>氏を東京大学に訪ねて、内容にお墨付きをもらった

<sup>24</sup> 『西洋の歴史（1）』（中等学校教科書株式会社、1947年）の記述に対するカトリック関係者からの非難は、アメリカ合衆国本国そしてマッカーサー元帥を巻き込んで、政治問題化し、そのため『西洋の歴史（2）』・『東洋の歴史（1）』・『東洋の歴史（2）』の発行は停止された。

<sup>25</sup> 1948年に発足した当初における新制高校2・3年の社会科選択科目は「東洋史」「西洋史」「人文地理」「時事問題」の4科目であった。翌1949年度から「日本史（発表時は「国史）」」「世界史」「人文地理」「時事問題」に改められた。

<sup>26</sup> 椋川一朗：1920年生、西洋史専攻。

上で、授業をしたことがありました。

また自治会の活動を通じて、東洋史の授業開設を要求しました。選択のはずなのに、選択をさせないのはけしからんという論理でした。しかし担当教師の不在を理由に却下されました。そこで漢文の先生を説得して、受験の面倒までは見なくてもよいという条件の下で、授業を開いてもらったこともありました。そうして私を含めて十数人が西洋史の教室から分かれて、小さな部屋で東洋史の授業を受けました。これもいい思い出です。世界史は、1949年度から実施されたため、私のときにはありませんでした。

#### 4. 出版社勤務

一 高校を卒業されて、すぐに出版社に就職されたとのことですが、その頃のことを、お話しください。

私は伯父や伯母の遺産で食いつないでいましたが、空襲で焼けてしまい、また戦後のインフレのため、遺産では立ち行かない状況になりました。したがって、進学は断念して、働かざるをえなかったのです。だが旧制中学4年のときに大学受験をしたことがありました。今から思えば、ずいぶん無謀な形で受験をしたことでもあり、このとき受験した者は、私を含めて、ほとんど落ちましたが、一番成績の低かった者が父親の金の力で合格するのを見てしまい、幻滅したというのが、進学を断念したもう一つの理由です。とはいえ、できたばかりの大学の通信講座には籍をおき、若干の単位はとりましたが、追込みとなると泊まりこみが続くというめちゃくちゃな出版社勤務のものになりませんでした。

そして高校を卒業して、出版社に勤めることになりました。明日から出勤という日に高橋先生にお会いしたくなり、八王子駅近くのご自宅に伺ったところ、「いいところに来た」と、徹夜で毎日新聞社の『世界の歴史4日本<sup>27</sup>』の索引作りを手伝わされて、翌朝、八王子から初出勤しました。

はじめに勤めたのは社会科教育研究所という出版社で、2年間いました。ここは山崎喜与作氏が社長兼主幹で、『社会科教育』という雑誌を発行していました。実は山崎氏は暁星中学での私の地理の先生でした。戦争中に書いた文章で、ひょっとするとページされそうだということで、その前に身を引いて始めた出版社でした。『社会科教育』は1947年から1951年までの4年ほど発行されましたが、この間の後半に当たる時期に勤めていたこととなります。編集は山崎氏と私の2人でした。高校を出て、すぐに教育雑誌の編集の仕事をするというのは、現在では考えられないことです。

『社会科教育』は主として小学校・中学校の教師を対象とした雑誌でした。ただし当初は、中学といえ、旧制が念頭にあったと思いますので、高校の内容も含まれていません。当時は「社会科教育」と題した雑誌は他にはありませんでした。ですから、ある時

---

<sup>27</sup> 世界の歴史編集委員会編『世界の歴史』全6巻、毎日新聞社、1949～1950年（1952年～1954年増補版）。第4巻「日本」は、遠山茂樹、石母田正、高橋碩一による。



期はとても売れました。その後、海後勝男<sup>28</sup>氏らを中心としたコア・カリキュラム連盟による『カリキュラム<sup>29</sup>』などが現れてきました。また歴史教育者協議会の機関誌を社会科教育研究社で出すという計画がありましたが、資金繰りがつかずに取りやめになりました。そのとき機関誌用に集めた原稿を、歴史教育の特集号<sup>30</sup>として『社会科教育』に入れたというようなこともありました。

一 『社会科教育』23号(1949年8月)の「歴史教育の基本問題<sup>31</sup>」という論文で、高橋氏は、同年4月の文部省通達「高等学校社会科日本史、世界史の学習指導について<sup>32</sup>」を絶賛しています。この論文を後に再収録した『歴史地理教育』の「編集部註」では、この「文部省通牒は、当時文部省事務官であった故渡部是<sup>わたなべこれ</sup>氏が、高橋氏に意見を求めて作成した文章であった<sup>33</sup>」と説明されています。この「編集部註」は、佐藤先生がお書きになったものでしょうか。

そうです、これは私が書いたものです。この一文は、私が高橋先生から直接、聞いて、書きました。この通牒は、高橋先生が渡部氏に書かせたものではないでしょうが、事実上は、2人の合作ではないかとも思います。当時、高橋先生は、学習指導要領作成の委員でもありまして、文部省にいた渡部氏とつながりがあったのでしょう。

また渡部氏は、その後、若くして亡くなられましたが、あるとき、「戦争中の関係書類を文部省でどんどん燃やしている。なんとかならないか」という悲痛な電話を、高橋先生に掛けてきたことがあったそうです。

一 『社会科教育』には、世界史教育に関する論文もいくつか掲載されていますが、何か記憶されていることはありませんか。

「世界史」という新科目が出来たことは、社会科教育研究社にいたときに聞きました。世界史については、あるとき、有高巖<sup>34</sup>氏が東洋史と西洋史を足して二で割るような論

---

<sup>28</sup> 海後勝男：1905～1972年、教育学専攻。

<sup>29</sup> 1949年1月からコア・カリキュラム連盟により『カリキュラム』(誠文堂新光社)が月刊で発行された(現在の日本生活教育連盟編『生活教育』)。

<sup>30</sup> 「特集 歴史教育」は、『社会科教育』30号(1950年4月)である。

<sup>31</sup> たかはし・しんいち「歴史教育の基本問題—社会科歴史の新出発によせて—」『社会科教育』23号、社会科教育研究社、1949年8月。

<sup>32</sup> 「高等学校社会科日本史、世界史の学習指導について」：1949年4月12日、発教247号(文部省教科書局長からの通達)。

<sup>33</sup> 『歴史地理教育』第184号(臨時増刊号 歴史教育運動の胎動—歴史教育のあゆみ1—)、歴史教育者協議会、1971年7月、84頁。

<sup>34</sup> 有高巖：1884～1968年、東洋史専攻。

文を持ち込んできました。そこで私は、有高氏の論に対抗するような論文を、同じ号に掲載したいと考えました。この私の依頼を受けて書かれたのが、友田行夫「世界史の構想」<sup>35</sup>です。これは川崎庸之<sup>36</sup>、野原四郎<sup>37</sup>、井上幸治<sup>38</sup>の三氏が討議したものを、川崎氏がまとめて、「友田行夫」のペン・ネームで掲載したものです<sup>39</sup>。野原、川崎両氏とは研究会などでよく顔をあわせていました。ところが、その後、有高氏は「書き直すから」と論文を一度持ち帰ったため、二つの論文は同じ号には載りませんでした<sup>40</sup>。

ー 当時の出版界での検閲は厳しかったそうですが。

私が入社した頃にはすでに事後検閲になっていました。したがって雑誌を出した後に、内幸町のCIE（民間情報教育局）のビル<sup>41</sup>に持って行きました。事後検閲ということもあり、私がいたときには、検閲に引っかかることは一度もありませんでした。CIEに行くと、日系二世の担当者からアメリカの教育論文を渡され、雑誌に掲載するようによく勧められました。暁星中学の英語の先生に翻訳していただいて、なるべく載せてあげましたが、ほとんどが障害児教育のものであり、山崎氏も「もう少し社会科に関連したものを選んでくれないかな」とぼやいていました。ただし、原稿料を取られるようなことはありませんでした。

私が入社する前の事前検閲のことは、山崎氏から聞いています。戦前・戦中の検閲は空白のまま発行できたそうですが、占領軍の検閲は、検閲の跡を分らないようにするため、空白を許さない厳しいものでした。そのため、この時期の『社会科教育』も、変なところに広告を入れて、検閲された部分をごまかしていたそうです。

社会科教育研究社は、私が退社して間もなく、なくなってしまいましたが、当時はこのような小さな出版社がたくさんありました。

ー その後、勤めていらした出版社では、どのようなお仕事をなさったのでしょうか。

その後、<sup>おやま</sup>小山書店に勤めました。ここは『チャタレイ婦人の恋人』（伊藤整訳、1950

---

<sup>35</sup> 友田行夫「世界史の構想」『社会科教育』第25号、社会科教育研究社、1949年10月。本論文も註33に再掲されている。

<sup>36</sup> 川崎庸之：1908～1996年、日本史専攻。

<sup>37</sup> 野原四郎：1903～1981年、東洋史専攻。

<sup>38</sup> 井上幸治：1910～1989年、日本史専攻。

<sup>39</sup> このことは註33の「編集部註」でも解説されている。

<sup>40</sup> 有高巖「世界史の構想」『社会科教育』第26号、社会科教育研究社、1949年11月。

<sup>41</sup> CIEのビル：千代田区内幸町2丁目の日本放送協会（NHK）の放送会館のこと。占領軍に接収されて、CIEやCCD（民間検閲局）ラジオ課、占領軍向け放送WVTR局が使用していた。

年)を出したことで知られた文芸出版の会社ですが、城戸幡太郎<sup>42</sup>氏監修で『私たちの生活百科事典<sup>43</sup>』という全17巻の子ども向けの学習事典を1950年頃から作っていました。第1巻「家」が出たときには毎日出版文化賞を取っています。私は1951年の6月頃から入りました。高橋先生が歴史の監修者になっておられ、東洋史の古島和雄<sup>44</sup>氏、西洋史の荒井信一<sup>45</sup>氏を呼んで、編集にかかっておられたところに、荒井氏から私に声がかかり、囑託として働くことになりました。ちょうど2年間ここにいました。

その後、中教出版で、小学校社会科教科書である『あかるい社会<sup>46</sup>』の編集を1年間やりまして、1954年から10年間、歴史教育者協議会の事務局の専従を勤めました。

## 5. 歴史教育者協議会、日本歴史学協会

一 佐藤先生は現在(2004年1月)、歴史教育者協議会の委員長をなさっていますが、創設当初のことをお聞かせください。

歴教協(歴史教育者協議会)の創設は、事前に高橋先生から聞いていました。私はその創立大会を、社会科教育研究社から取材に行ったら、いきなり総会で発言させられ、つかまってしまいました。それで、なんとなく手伝うようになりました。始めは東京都立文京高校(仮校舎で現在の本郷小学校の場所)に事務所を置いていましたが、山崎氏の申し出もあって、社会科教育研究社を事務所とするようになりました。私が退社したあとは、ある会員の自宅を連絡場所にしたようなこともありました。

当初は、東京での意欲的な教師の少ない人数での出発でした。小澤圭介<sup>47</sup>氏、大森(桑田)良治<sup>48</sup>氏、大江匡輝<sup>49</sup>氏などが事務局を支えていました。ここに私も入れてもらいました。以後、歴教協の活動を続けていくことになります。私のように高校を出て間もなく学会のようなどころに参加した人はあまりいないでしょうし、これまでの55回の大会にすべて出たのは私だけだと思います。

一 日本歴史学協会での活動について、お話しください。

日歴協(日本歴史学協会)では、1970年から2003年まで、2年間はぬけていますが、委員を務めました。私は大学とは無関係なので、逆に、学閥を超えて、勝手なことを言

---

<sup>42</sup> 城戸幡太郎：1893～1985年、心理学専攻。

<sup>43</sup> 生活百科刊行会『私たちの生活百科事典』小山書店、全17巻・増巻2、1951～1954年。

<sup>44</sup> 古島和雄：1921年生まれ、東洋史専攻。

<sup>45</sup> 荒井信一：1926年生まれ、西洋史専攻。

<sup>46</sup> 周郷博ほかで、『あかるいしゃかい二年』、『あかるい社会三年上下』、『あかるい社会四年上下』、『あかるい社会五年上下』、『あかるい社会六年上下』が、中教出版から1951～1957年に発行された。

<sup>47</sup> 小澤圭介：1922～1994年、日本史専攻。

<sup>48</sup> 大森(桑田)良治：1925年生まれ、日本史専攻。

<sup>49</sup> 大江匡輝：日本史専攻。

ったり、したりすることができたと思います。1995年のシンポジウムで「歴史学講座再編成の現状<sup>50</sup>」が私の名前を出ているのは、「大学人では角が立つから」ということだったからでもありましょう、私が報告することになったのです。

日歴協での活動の中でも特に、1986年以来、17年間、文化財保護特別委員会委員長を務めました。実は1985年に上行寺東遺跡（横浜市金沢区）という中世の寺院遺跡がマンション建設で破壊されるのを阻止することが出来ませんでした。そのときの文化財保護特別委員会の委員長は、元教科書調査官で青山学院大教授の貫達人<sup>51</sup>氏でした。彼自身は同遺跡の保存活動に尽力されたものの、日歴協の特別委員会を動かすことはできなかったのです。私は、ちょうど選挙で落ちて、2年間、日歴協の委員会にいなかったときでした。しかし、1986年、委員に復活して、常任委員となりました。そのとき、東大史料編纂所の人たちから重要な遺跡破壊を放任したと日歴協への批判を受けました。そこで私は、自分が文化財保護特別委員会を引き受けるからと、特別委員長を買って出て、周囲に協力を要請したのがきっかけです。そのときの委員長だった筑波大学の野口鐵郎<sup>52</sup>氏と相談して、特別委員会として文化財保護の運動を積極的に進めていくことになりました。

## 6. 専門学校講師

— 佐藤先生は専門学校の講師を長く続けられて、一家言がおありと伺っておりますが、その辺のことをお話ください。

1967年に東京スクール・オブ・ビジネス（のち東京観光専門学校を分立）の非常勤講師となりました。ここの校長が知り合いだった松島栄一<sup>53</sup>氏に歴史講師の紹介を依頼し、推薦された高橋先生が半期授業を持ったところで、私と交代しました。授業は日本近代史です。ここで教科書も作りしました<sup>54</sup>。その後、私が旅行関係には日本文化史が必要であると主張して、文化史の授業も設けてもらい、この教科書も作りしました<sup>55</sup>。私の授業は現在も別の学校（武蔵野外語専門学校）で細々と続けています。

1985年の年度末テストの中で「1945年に終わった戦争で、日本が一番長く戦った国はどこか」という問題を出したところ、授業でずいぶんと説明したにもかかわらず、「ア

---

<sup>50</sup> 佐藤伸雄「歴史学講座再編成の現状—日本歴史学協会アンケートをもとに—」、『日本歴史学協会年報』第11号、日本歴史学協会、1996年3月。

<sup>51</sup> 貫達人：1917年生まれ、日本史専攻。

<sup>52</sup> 野口鐵郎：1932年生まれ、東洋史専攻。

<sup>53</sup> 松島栄一：1917～2002年、日本史専攻。

<sup>54</sup> 佐藤伸雄『日本近代史』東京ビジネス協会、1969年（東京スクール・オブ・ビジネス出版局、1983年、3版）。

<sup>55</sup> 佐藤伸雄『日本文化史』東京観光専門学校出版局、1988年、3版。

メリカ」という答えた学生がいて、驚きました。追跡調査の結果、その時の授業の欠席者であることが分りましたが、次からは授業の最初にアンケートをすることとしました。すると「アメリカと一番長く戦った」という回答が 60%ほどでした。「中国と一番長く戦った」という回答は 20%しかありませんでした。その後、10 年ほど、毎年数百人規模のアンケートを取り続けましたが、この割合は、ほとんど変わりありませんでした。専門学校から見た義務教育、準義務教育での近現代史授業の問題点のいい資料になったと思っています。この結果を、日本の歴史教育の内なる問題として、あちこちで書いたり、話したりしました<sup>56</sup>。

またアンケートで学生の意見を聞く過程で、留学生の氏名の呼び方の問題に直面しました。専門学校に来ていた留学生の半分は韓国から、残りの半分は中国・台湾からでしたが、彼らには漢字で名前を書いた上で、読み方をカナもしくはローマ字で書いてもらいました。韓国の学生は例外なく、韓国式の読み方で記入しましたが、中国・台湾の学生は全員、日本式の読み方で記入してきました。これには驚きました。そこで、中国語も韓国語も堪能な同僚にこのことを話したところ、彼がいうには、韓国人も中国人もそれぞれの呼び方で出席を取ったら、韓国人は喜んだが、中国人からは「自分の名前とは思えません。返事をしそこなう恐れもありますし、やめてください」と抗議されたとのことでした。私は、これは大事な問題をはらんでいると感じました。韓国人から韓国式の読み方で呼んでほしいといわれるようになった時、はじめは少し戸惑いましたが、これは正しい主張だと思います。ですが、同じことを中国人は言いません。このことから韓国・中国はどちらも日本からは被害者の立場にありますが、受け取り方が違うのではないかと、また主張の仕方が違うのではないかと思いました。その後、中国人と話しをするときは、同じことを韓国人はどう考えるだろうか、そして韓国人と話をするときには、同じことを中国人はどう考えるだろうか、自分自身で問い続けてきたつもりです。

## 7. 日中交流

一 佐藤先生は、長く中国との交流に携わってこられました、そのきっかけからお聞かせください。

発端は、1955 年の中国社会科学院の学術代表団が初めて来日したことでした。そのときの団長が郭沫若<sup>57</sup>氏でした。歴史学では翦伯贊<sup>58</sup>氏、考古学では尹達<sup>59</sup>氏が来られました。それで歴史学の 6 学会（史学会・大塚史学会・歴史学研究会・民主主義科学者協会歴史部会・東方学会・歴史教育者協議会）で翦氏・尹氏を招いて交流しました。私はまだ 25

---

<sup>56</sup> 佐藤伸雄「義務教育での歴史教育の問題点」（日本学術会議の教育学研連・歴史学研連主催、シンポジウム「歴史教育と国際交流」、1992 年 9 月）など。

<sup>57</sup> 郭沫若：1892～1978 年、文学・歴史学専攻。

<sup>58</sup> 翦伯贊：1898～1968 年、歴史学専攻。

<sup>59</sup> 尹達（劉翟）：1906～1983 年、考古学専攻。

歳でしたが、歴教協の専従でしたので、これに関わりました。特に、このときのことを本<sup>60</sup>にする作業に裏方で協力しました。これが最初でした。1963年にも第2回として代表团が来ています。このときは東京と大阪で交流会を行ないました。その間の1961年に民間教育家代表团が中国に赴きました。このとき私は行きませんでした。民教連(民間教育団体連絡会)の世話人をしていて関係でお手伝いをしました。また1963年の「鑑真和上円寂1200年記念行事」の裏方にも関わりました。歴教協の初代委員長だった三島一<sup>61</sup>先生が、日中友好協会の副会長でもあったこととも関係して、私も色々とお手伝いしました。三島先生は私と自宅が近かったため、私は、歴教協の委員会終了後にタクシーに同乗して三島先生をお送りしていました。この車中で中国人の考え方や中国人との交際方法の“特訓”を三島先生から受ける機会を得ました。これが後にずいぶんと役に立ちました。また三島先生は私たち夫婦の仲人をしてくださった方でもあります。

このような日中の交流が文革(文化大革命)ですべて、だめになりました。文革は日本国内に分裂を持ちかけてくることになりました。色々な団体が振り回されたこともあり、こちらも白けてしまいました。文革が始まったときも、当初、私も中国への憧れのようなものがありました。二つの事件で、そのような気持ちも消え失せました。ひとつは、郭沫若氏が1966年に「自分の書いたものは価値がないから、焼き捨てるように」と発言したという報道です。もうひとつは、中日友好協会会長の廖承志<sup>62</sup>氏による「日本共産党はけしからん。なぜ武装蜂起をしないのか」という発言です。これは1964年の海外旅行自由化を受けて、日教組(日本教職員組合)が送り出した中国旅行団に向けての歓迎の挨拶でした。ちょうど1966年の文革の始まった直後です。その発言を参加者から聞いて、本来なら最高の日本通で、暁星中の先輩でもある廖氏<sup>63</sup>がそのような発言を出来るわけがないと思いました。つまり廖氏がそのように言わざるを得ない雰囲気になっていると感じたのです。また、私は日中文化交流協会に参加していましたが、井上清<sup>64</sup>氏による「毛沢東万歳、万歳、万々歳」で終わる機関紙の巻頭文を読んで、呆れかえりました。そのため、しばらく日中交流から手を引いてしまいました。そのため、1972年の日中国交正常化に対しても、私は冷ややかに見ていたという状態でした。

— 文革後の交流について、お聞かせください。

私が再び国際交流に関わるようになったきっかけは、1980年のブカレストでの国際歴史学会議への報告書作成の協力でした。このときの事務局の事実上の中心は、私でした。

---

<sup>60</sup> 鈴木俊・西嶋定生編『中国史の時代区分』東京大学出版会、1957年。

<sup>61</sup> 三島一：1897～1973年、東洋史専攻。

<sup>62</sup> 廖承志：1908～1983年、対日外交の責任者。

<sup>63</sup> 廖氏は東京生まれで、一時帰国の後に、暁星中学を卒業して、早稲田大学で学んだ。

<sup>64</sup> 井上清：1913～2001年、日本史専攻。

歴教協と歴科協（歴史科学協議会）と広島史学研究会の3者が、報告書「日本における歴史教育と教科書の問題<sup>65</sup>」を作成し、共同で代表を送ることになっていました。このときは、代表者であった高橋先生が病気で行けなくなり、吉田悟郎<sup>66</sup>氏が報告をされました。また1984年の比較史・比較歴史教育研究会による日中韓の東アジア歴史教育シンポジウムにも会員として関わりました。だが、この時の日本側の発言が、それまでの日中交流の経緯に目が向けられていなかったことに問題を感じました。このとき以来、日中の交流に私自身が積極的に関わるべきだと思い、来日した中国の学者に、私のものを含めた色々な本をお渡ししました。翌1985年、中国から招聘されて斎藤秋男<sup>67</sup>・吉田悟郎・二谷貞夫<sup>68</sup>の3氏が行くことになりました。このとき、二谷氏に「中国に行くにあたって、これくらいは是非とも知っておいてほしい」と言って、戦後の日中のいきさつを年表などにまとめて渡したところ、二谷氏がこれを整理して皆さんに配ってくれました。

また1982年7月の「侵略・進出」の教科書問題のときは、タイミングよく8月に大会があったこともあり、歴史学の関係の団体で一番早く声明を出したのは歴教協でした。その年の秋には、日本史研究会の大会で、南海大学から愛知大学に来て研究していた俞辛焯<sup>69</sup>氏から、「教科書の問題を批判している日本の学者がこれほど多くいるとは知らなかった。中国に早く知らせたい」と直接、聞きました。また、1984年から1年間、西安外語学院に交換教授で行かれた井口和起<sup>70</sup>氏からも、「中国では、日本の歴史教育のことは何も知らない。歴教協ももう少し頑張らないとだめだ」と言われました。このようなこともあり、中国は日本のことをほとんど知らないのだなと痛感しました。そのため日本のことを中国・韓国に積極的に伝えていく必要を感じました。そうしなければ、特定の報道が、そのまま信じられてしまう状況は変わらないと思いました。

その後、歴教協でも日中交流を行なうことになりました。1985年の比較史・比較歴史教育研究会から行かれた人たちが緒をつくって下さったのですが、中国の歴史教学研究会の年会に招かれて、上越教育大の二谷氏、都立高校の鬼頭明成<sup>71</sup>氏、そして私の3人が安徽省に行きました。1987年のことです。私は、それから都合8回、中国に行きました<sup>72</sup>。そのうち7回は団長でしたが、最後は二谷氏にお願いしました。1993年からは歴教協の「日中歴史教育交流の旅」として5回続けました。4回を終えた時点で歴教協の年報に総括を書きましたが、色々あって「日中歴史教育交流の旅」は5回まで行ないました。中国に、日本の歴史教育のことを伝えるという当初の目的は、ある程度、実現

65 『歴史地理教育』第305～306号、1980年4～5月。『歴史評論』第361号、1980年5月。

66 吉田悟郎：1921年生まれ、世界史・世界史教育専攻。

67 斎藤秋男：1917～2000年、アジア教育史専攻。

68 二谷貞夫：1938年生まれ、社会科教育・歴史教育専攻。

69 俞辛焯：1932年生まれ、日本史専攻。

70 井口和起：1940年生まれ、日本史専攻。

71 鬼頭明成：1940年生まれ、日本史専攻。

72 1987年、1991年、1993年、1994年、1995年、1996年、1997年、2000年の8回。

できたと思います。中華人民共和国が出来て、戦後の日中交流が始まったのも、つかの間、分断されてしまいましたが、これを何とか、つなげようと努力してきました。これも、ある程度、果たすことが出来たと思います。

－ 今後の東アジア交流について、抱負をお聞かせください。

私も年ですので幕の引き方などを考えています。公務は間もなく降りるつもりです。高橋先生からは「お前は、人のやらないことをやれ」と言われてきました。歴教協の活動でも、教員ではできない仕事をしてきたつもりです。

そして、まだまだ日中・日韓のことはやらなければならないと考えています。日中や日韓の交流に関しては、侵略戦争や植民地支配の反省の必要と同時に、だからと言って卑屈になってもいけませんし、どのようなことを主張できるかという問題は、常に自問しています。そして、私が知っている中国の人たちの多くは、そろそろ定年です。中国側も文革後の世代になっていますので、次の世代の人たちのために、個人と個人のパイプをつなげていく仕事を考えています。

また、日中・日韓の過去のことは当然ですが、それ以外にも学生に「知っておいてほしいこと」をぶつけていく必要を感じています。そのためにも、日本・中国・韓国の学生に向けて、現在における相互の理解を進めるためのものを、まとめていきたいと考えています。

－ 本日は、長い時間、ありがとうございました。



## 後記

インタビューの際には、ご自身の年譜と著作目録を手書きで急遽、ご用意くださり、聞き手はそれらを拝見しながらお話を伺った。歴史教育に関わられた期間のみでも、高校ご卒業以来の55年にわたる年譜、1960年代以降の著書・編著・論文・その他236を数える著作目録を、ここに掲載できないことは大変に残念である。ここでは、インタビューの終わりの部分で抱負として述べられ、その後、発表された東アジア交流に関するご論考のみを紹介申し上げたい。

佐藤伸雄「留学生から学んだこと、留学生に語ったことー国際理解を深めるためにー」  
(二谷貞夫編『21世紀の歴史認識と国際理解ー韓国・中国・日本からの提言』明石書店、  
2004年8月)

最後に、お忙しい中をインタビューの申し出に快く応じてくださり、長い時間にわたって、お話をしてくださった佐藤伸雄先生に感謝申し上げます。またインタビューに便宜を図ってくださった歴史教育者協議会の事務局の皆様にも御礼申し上げます。

(注記に関して、多くの文献やホームページの情報を利用させていただきましたことを申し添えます。)

(文責：茨木智志)